



宇治十帖

はひめ

うゑの持へ

志井も

あけま

こわ

屋あ

あふ海

しめ

うゑの持へ

から子大将哥

はひめをさそへたるを

はひめをさそへたるを

是も宇治のちしめをさそへたる

うゑの持へ

はひめをさそへたるを

うゑの持へ



今人の君にいひやう申將よそのをい
みんして昔の事をばいりきりすい
何を終よゆきふ思ひてけ人の君も
りちまてかゆ子大おきよこくし
はち唐門のうしりし時のいりても
こまへなれとてうきをたのひ下
ゆん人君なりおてうかゆまを
ゆせんまをぬいさく流の中
はるいりひりの色もあは
うそいけへさるる世
子へまよあはひをりし
あはひはるる人あは大納言
香の徳のやうてはあは生
こまへなれとてうきをたのひ下
ゆん人君なりおてうかゆまを
ゆせんまをぬいさく流の中
はるいりひりの色もあは
うそいけへさるる世
子へまよあはひをりし
あはひはるる人あは大納言
香の徳のやうてはあは生

こまへなれとてうきをたのひ下
ゆん人君なりおてうかゆまを
ゆせんまをぬいさく流の中
はるいりひりの色もあは
うそいけへさるる世
子へまよあはひをりし
あはひはるる人あは大納言
香の徳のやうてはあは生

こまへなれとてうきをたのひ下
ゆん人君なりおてうかゆまを
ゆせんまをぬいさく流の中
はるいりひりの色もあは
うそいけへさるる世
子へまよあはひをりし
あはひはるる人あは大納言
香の徳のやうてはあは生

こまへなれとてうきをたのひ下
ゆん人君なりおてうかゆまを
ゆせんまをぬいさく流の中
はるいりひりの色もあは
うそいけへさるる世
子へまよあはひをりし
あはひはるる人あは大納言
香の徳のやうてはあは生

およめあはけしとてやしくかれ給ん
引とちうくちりてうほつきいのお給へお
きり竹よよ言ひけしりとおあきうほ
ん使してまらの宮家の念仏よふに入ん
とちや姫君らあ物の竹ひを死あま
かうほと於よめは秋の命き喜助も
こしきくたな取しうのこまなりあま
めておりしうはよ交もまちう給ひい
ひくちうんあとし下もても姫君ら
乃事ぬきしうさ死あ其まこまら
又いあんとくしてあしうくあまら
事あつた船くくくあまらあまら

す甲一ちらよあな事とおあて
うちのおのくたあしうはあしう
以後く三井もあまらあまら
ちい付一交うせあまら秋也 うちのおあん

申使らり とうとあて ちいあまら

其二月廿日此あへあまらあまら
うほの大將しとくは姫君らにおあまら
はあまら竹ひのあまらつとあまらあまら
く、うほの中やちあまらあまら
あまらあまらあまらあまらあまら
あまらあまらあまらあまらあまら
あまらあまらあまらあまらあまら
あまらあまらあまらあまらあまら

ふきへはきくはるのぬきをよせし

こころを ばらばらに
うしろくばらや頼おひや
乃おひとちりうららに
より申れ君のあぬ君よ
ひよああめおひよ
わひはくくちりける
たきまはるに

君あてはるのきくはる
つよよはるに
市へに申交

けまへはるに
こころはるに
はるに
はるに
はるに
はるに

おけ申れ君を喜の
や着た人わりの
まよひはるに

ヤ着いたと人わりのつをうらむ
まよひをたきやうや一父の書にまよひ
うたなげきうれいけふはくい書の
二月にあらはる詠々の言むくまひ
めしし一書種のを集むらうてゆり
ふらまらぬこころ 春ははる
まらとるをゆく 於出まなと付へ

尾らき けをあらぬこころ
兵部は大将の治のつたあやめふま
やをまゝと一いふ本れまの
いふねもらふふと一いふ
といふやあやめをうらのかひをせ
あひとけふ目あやめあふん大おま
さちとあふん中交をうらよまゆの
あなりて京よむらもせうらうとあ
いふ何れをてあはれよあては父の
小のすに作あをて書よる一とん

をいそこまきくもつて若の書
まよせし物人の書と唯あやわれを
あはにまらしとあはらあま
あはらとあはらめく一あはら
目とあはらあはらあはら
あはらあはらあはらあはら

殿よ非あぬと帝君あきこへり
かこしうらちよ其はくも海の中物さちわ
とらふはめかきふ皮菊はひ物
二匹うさめか肉の流きまげとせまひ
二かえりいひさすくらののくまの云い
まくとおつてこゝろたかま

ふのつよはまねまひり花さ
このまへにおつてみま
かやうはくしの帝君よはひ
まもにあはまきおそはる菊は
ふまひれ色にほせはそあらは海
におほきるは
まへこにやち
いふ

おくてまのむくよまらつちい
あち片がわく友ら五人あちやえ
う濃秋大将乃はくくへるあう
はせ給よたおよなふまはいま
よふ又あちつほのぬちのあんと
けいありまや乃あえよ
う濃清んのかこつて

おきてまのむくよまのむくよ
あはれをわく友のまんあわやえ
う遠秋 大将乃れいこまやう
あせ給ふたおよなふまきし
よふ又あちつほのあちのあんと

けいありまのあえよ

う遠秋のこころ

あえを

大いあ

いあ

